商いの新しいものさし

㈱商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

第166回

アスナル金山とアート・ブロック提案

先日、名古屋市主催によるアスナル金山の再整備や新たな劇場整備を核としたまちづくりを掲げた「金山駅周辺まちづくりシンポジウム」が開催され、筆者が「アートの力によるまちづくり」をテーマに基調講演を担当した。会場は多くの市民や関係者で満席となり、後半の名古屋地区の大学教授などとのパネルディスカッションでは熱い議論が繰り広げられた。

名古屋市統計年鑑によると、金山総合駅はJR東海道線・中央線、名鉄、名古屋市営地下鉄が交差し、かつ中部国際空港の玄関口である。コロナ前の1日の乗降客数48万人は名古屋駅の129万人に次いで中部圏では2番目のターミナル駅だ。交通結節点であり、名古屋駅から公共交通で5分の立地ながらも、わざわざ金山エリアに行くだけの理由が見当たらなかったのが筆者の本心だった。

現在、金山のシンボルとして来街の大きな吸引力となっているのが、2005年に15年間限定で開業したオープンモール「アスナル金山」だ。金山北地区再開発事業として底地は名古屋市が所有、名古屋まちづくり公社に借地権を設定し、同社が開発・運営を担う。敷地面積1万4200㎡、店舗数は約60店と小ぶりながらイベント広場を囲むように施設設計され、年間約420回のイベントを開催するなど運営努力を重ね、来場客数は約1500万人に達する。市は28年まで定期借地契約を延長し、街に開放されたアスナル金山での若い世代の思考を柔軟に受け入れる姿勢を持ち合わせている。

街に開かれたSC「アスナル金山」

「気軽で気楽。便利で快適」のフレーズのように、SC敷地内には地下鉄の出入り口もあり、コンサートなどで使われる市民会館、音楽プラザ、今は閉館しているが旧ボストン美術館などもある。市は文化・芸術を感じつつ、ウォーカブルな街区形成を目指す構想に舵を切った。

この先、古い劇場を壊して新しく整備するだけでなく、同時に街区全体の魅力を高めるアート・インフラ整備が不可欠だと思う。駅周辺の建物は不揃いで雑然としており、現状の公園や交通広場、歩道、街路樹なども旧態依然な環境のイメージだった。ストリートファニチャー1つとっても、「安らぐ」「人と会う」「眺める」という行為に対し、精神的美しさや住民が美徳だと感じるパブリックアートで包まれていくことを望みたい。パブリックアートは愛されるアートか、放置されるアートかによって人々に大きな影響を与え、街の性格を形成する要素になるからだ。

街と一体化したアート空間にするには、公共建築の建設費の1%を芸術やアートの推進に充てる「1% for Art」という手法もある。1935年の大恐慌後のアメリカにて、仕事のないアーティストに対する救援策として生まれた。街にパブリックアートが溢れていると、気づかないうちに環境が形作られ、心が豊かになる。自分が住む街に愛着を持つ人の数が多いほど、街は魅力的になり、訪れる場、働く場所としても良質な環境になっていく。金山地区という大きなくくりより、金山駅周辺でのアート・ブロック特区としての捉えた方がメッセージ性やアイデンティティが強く発揮できると考える。

先のパリ五輪開会式では「アートの力によるまちづくり」が革新的だった。フランスの歴史と文化を音楽、ダンス、演劇、サブカルチャーまで、アートをエンターテインメントで表現したのは、人間一人ひとりの個を尊重し、様々な価値観を認め、かつ共有する多様性社会でのオリンピックにおける問題提起だと感じた。パリは花の都からアートの都だと世界中に発信し、さらにアートの力による好循環の都市街づくりを育んでいくだろう。

心の豊かさを求める時代は、アートを五感で実感できる空間や対象が増えるに連れて、幸せになれる場所へと人は集まる。将来の金山駅周辺再整備でも、「アスナル金山」のような10～20代を中心にした若い世代が自由に時間を過ごせる街の居場所が継承されることを切望する。そこから街なかにジワジワとインクが染み出すようなアート・ブロック特区が形成され、次世代型の都市街づくりの未来図が描かれていく。そんな予感がしてならない。